

(そのとき、)イエスは、ペトロ、ヨハネ、ヤコブを連れて、祈るために山に登られた。祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、衣は白く光り輝いた。見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最後のことについて話していた。ペトロと仲間は、眠りこけていたが、目を覚ますと、イエスの栄光と、一緒に立っている二人の人が見えた。この二人がイエスから離れようとしたとき、ペトロがイエスに言った。「先生、私たちがここにいるのは、素晴らしいことです。幕屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのために。」ペトロは、自分でも何を言っているか、分からなかったのである。 —ルカ9章—

地上を旅する力を載いて



イエスが歩まれた「十字架の道」は、地上の私たちが楽園に戻るために、天の父が用意してくださった必須の「通過門」です。

かつて、信仰の祖アブラハムが、罪深い世界、カルデアのウルから、「私が示す地に旅発つように」と、御父に導かれたように、イエスが歩んで示して下さった道に従えば、この道がいかに険しくても、天からは御父が見守っておられ、地上では、神から遣わされた守護の天使が同伴しておられることが、今日のみことばに見る、イエスの「変容」の出来事で示されていることが、私たちに知らされているのです！

宇宙を創造された神さまが、何でもお出来になりながら、地上の私たちの人生に悪や苦難が存在することを許されるのは、他ではない、愛する「わが子」の幸せを願う愛あつてのことでしょう！ それは、天に用意しておられる栄光に、我が子が到達する前に、愛する子に「この体験」をしてほしいと御父が願われたからに相違ないからです。

それ故、私たち信仰者は、眼前にその「栄光」を仰ぎながら、地上のどんな「十字架」にもひるまない覚悟を持つのです。 今日、「山上の変容」で栄光を見せてくださった、主イエスから教わり、**地上を旅する力**を戴きましたから！

産業革命以来、人はひたすら「欲望」を求め続け、それに応えるものだけが生き延びて、人類は今日に見る豊かさ志向の価値観を造ってきましたが、「貧しさ」を厭うてゴミのように捨てて来た溢れる豊かさの中で「生きがい」が見いだせないでいる人々がいる現実があります。 今、満足している人々も、「若いときは、自分で帯を締めて行きたい所に行っていたが、歳をとったら、他人に帯を締められていきたくない所に連れて行かされる(ヨハネ21、18)」その日がやがて来るのです。「死」よりも「老い」を恐れる時代は、豊かさ志向世界の一つの特徴です。

私事ですが、決して長寿を良しとしなかった被介護者の母が、99歳まで体を引きずって生かされていた意味を、私は、“母の介護に携わる不肖の息子の私が、「真人間」になるための教材に、母は我が身を、神に捧げているのだ”と気づかされました。

私にとって、「真人間」とは、①貧しさが苦にならない。②関わりは相手サイド。③誰とでも平和を築く生き方を目指すことです。